

「おい地獄さ行くんだで！」

二人はデッキの手すりに寄り

かかって、蝸牛が背のびをした

ように延びて、海を抱え込んで

いる函館の街を見ていた。

MEMO

「蟹工船」

小林多喜二

この小説には特定の主人公がおらず、蟹工船にて酷使される貧しい労働者達が群像として描かれている点が特徴的である。